

<実践報告・調査報告>

法学部の導入教育におけるスチューデント・アシスタント（SA）と 教員による協働の試み —「プレップセミナー」と「法教育演習」—

中井 歩¹

法学部では1年次春学期配当の演習科目「プレップセミナー」において、2014年度から先輩学生を新生の学修支援にあたるスチューデント・アシスタント（SA）として参画させている。そしてSAとしてのトレーニングと実践の科目として、「法教育演習」という科目を新設した。これにあわせて、「プレップセミナー」の授業内容は、将来の法学教育の基礎となる知識と技能を教えるべく、共通化を図る「パッケージ・コース」が導入された。こうした過程においては、科目担当教員だけではなく、「法教育演習」の受講生であるSA、ファシリテーションの学内専門部署であるF工房など、多様な立場の人たちが協働し、試行錯誤によって改善を進めてきた。これにより、学修者本位の導入教育の設計・運営に近づくことができているのではないかと考える。また、SAとして参画した学生にも、論理的思考力やリーダーシップ、積極性などにおいて成長実感が観察された。

キーワード：導入教育、教員と学生との協働、スチューデント・アシスタント（SA）、ピアサポート

1. はじめに

ついこの間まで「高校生」だった新生たちがスムーズに学部専門科目の学修に移行できるようにするためには、各大学や学部・学科の専門性に相応しい形での導入教育を構築することが重要である。このように指摘されるようになって久しい（藤田 2006；山田 2006）。導入教育が重要であるのは、学部における学修の基礎となる、知識と技能を身につけ、大学で学ぶことへの動機付けをする機会だからである。しばしば「答え」が明確に設定されている高校までの教科学習と、明確な「答え」のない「問い」を重視する大学での専門の学修との間にはギャップがあり、新生の多くが戸惑いを感じている。

京都産業大学法学部においても、1年次配当の少人数科目として「プレップセミナー」を開講し、導入教育を演習形式でも行っている。しかしながら、もともとは秋学期に開講されていたので、高校までの学習と大学での専門教育とを接続することを明確に目指した授業ではなかった。そこで、2010年度から開講学期が春学期に変更されたことを受けて、導入・接続の側面が重視されるよう

になっていった。それを受けて、2014年度からは「プレップセミナー」において先輩学生が新生の学修を支援する方式を取り入れ、展開させてきた。その教育効果は新生だけに限らず、先輩学生に対しても見られる。

本稿は、教員を補助する授業補助員としてではなく、学生を支援する先輩学生としての参画という実践について、その内容と展開を報告することを通じて、導入教育において学生と教員が協働することの可能性を紹介するものである。

2. 「プレップセミナー」の課題と スチューデント・アシスタント（SA）制度の創設

法学部の初年次ゼミである「プレップセミナー」は、現在は1年次春学期開講の選択必修科目である。クラス分けは割り当て方式で行われている。1クラスあたりの人数は20～25名程度であり、年度ごとに変動はあるがおよそ25クラス体制で運営されている。また本科目は、法学部の専任教員のみによって担当されている。本科目に、先輩学生であるスチューデント・アシスタント（以下、SAと表記する）を配属し、彼ら／彼女たちがクラ

¹ 京都産業大学 法学部

ス担当教員と協働して、新入生の学修の支援にあたる仕組みが、2013年度のトレーニング科目開講からスタートした。

2.1.「プレップセミナー」の課題

SA導入前の「プレップセミナー」では、クラスごとの教育内容において教員によりばらつきがあるという課題を抱えていた。これは、以前は1年次の秋学期開講の科目であった頃の名残があったためである。2009年度以前の「プレップセミナー」は受講生が担当教員の専門分野・テーマによって応募する形態だったので、本科目において何を修得させるべきか・どのような内容がふさわしいのかについての明確な合意があるとは言えない状況だった。しかし、本科目が春学期開講になったことから、受講生が選択する形でクラスを編成することが（時間的、事務手続き上の問題等から）できなくなり、クラス割り当てで運営することになった。また、開講期を前倒したことで、高校までの教科学習から法学部での専門教育への橋渡しをする、導入教育として位置づけられるようになった。これらのことから、1年次春学期の段階で何を修得させるべきかを明確にし、授業内容を共通化することが課題となったのである。

こうした課題がある中で、「プレップセミナー」に先輩学生がSAとして参画した先行事例において、新入生とSAの双方に教育効果が十分に認められることが明らかになった（伊藤・吉永 2013）。また、先輩学生が後輩学生の履修指導・学修支援にあたることの効用も、確認されていた（渡邊・吉永 2012）。2003年4月に設置された法学部の履修相談室には、3年次生と4年次生を中心とする学生履修アドバイザーが一定の時間（昼休みを含む、2限目～4限目）に常駐し、教員アドバイザーとともに学修支援にあたってきた。学生履修アドバイザーは、履修登録の相談や演習（ゼミ）選択時の情報提供のほか、科目担当教員と相談をしながら基礎的な科目についての勉強会を主催するなどの活動に取り組んでいた。つまり法学部において、先輩学生と教員との協働による学修支援の伝統があったと言えよう。

これらの経験と実績を踏まえて、「プレップセミナー」に参画する先輩（協働）学生をSAとして位置づけ、さらにはSAの活動を法学部の専門教育の中に位置づけて、授業科目にして単位化することが企画された。こうして、2013年度秋学期から「SAになるためのトレーニング」を行う科目を、2014年度春学期からは「SAとしての実践」を行う科目を、それぞれ新たな授業科目として創

設することが決まった。さらにこの機会に、授業内容のばらつきを解消するために、プレップセミナーの授業内容の共通化（パッケージ化）が図られることになったのである。

2.2.「法教育演習」の創設

SAの育成と実践についての科目化は、科目担当予定者（3名、それぞれ専門は刑法学、憲法学、政治学）を中心に、プレップセミナーの全体調整を担う法学部FD委員会と連携しながら進められた。まず科目としては、SAになるためのトレーニング科目として「法教育演習Ⅰ」を秋学期に（2年次生以上配当）、そしてこれを修了した学生が次の春学期にSAとして新入生に対する学修支援の実践を行う科目として「法教育演習Ⅱ」（3年次生以上配当）が、それぞれ開講されることが決まった。開講時期や配当などは決まったが、授業内容は未定のままであった。

そこで科目担当者はまず、受講生がSAとしての知識・技能を身につけることを可能にする、科目の授業内容を検討することにした。そして初期の段階から、「プレップセミナー」の内容の共通化（以下、「パッケージ・コース」化）を進めることにした。なぜならば、SAを受け入れる側の「プレップセミナー」の授業内容がクラスごとにまちまちな状況のままでは、SAになる前に修得させるべき能力や技能を明確にすることができないからである。もちろん、どのような内容の「プレップセミナー」であっても対応できるように、ファシリテーション（協働促進）やスタディ・スキル（読む・書く・調べるに関する一般的な技能）などの汎用的技能のトレーニングに特化するという方法も考え得る。しかしながら、「プレップセミナー」が法学部の専門教育への導入を目指した科目である以上、法学部で学修するにあたって身につけておくべき共通の知識・技能・態度があるはずである。まずは、この観点から検討して「パッケージ・コース」の内容を考えるとところから、「法教育演習Ⅰ」の授業作りに取り組んだのである。

2.2.1. パッケージ・コースの内容と目指したもの

「プレップセミナー」の「パッケージ」化以前にも、授業内容についての合意が全くなかったわけではない。シラバスに記載された「授業の到達目標」としては、「まずは、法学部で学ぶにあたって必要な基礎的能力（「読み、書き、調べ、話す」能力）や知識を身につけることを目指す」とされ、「法学や政治学の学習が、面白い、やりがいがある、と感じられるようになることが、究極的な目標で」としていた。また、身に付く力として

は、「法学・政治学を学ぶのに必要な読解力・論理的文章力・主体的な課題発見力・発信力などを身に付けることをめざし」ていた。これらの到達目標については、「プレップセミナー」の担当者会議の機会等を通じて共有されていた。

しかしながら上述のように、授業内容についてクラスごとに差があり、例えばディベートを主な内容として取り入れるクラスもあれば、資料を収集して発表するグループワークを重視するクラスなどがあった。

そこで「パッケージ・コース」において重視すべき、受講生が身につけることを目指す知識・能力・態度を具体的に示し、それを習得できるための教育内容について整理することにした。

まず第1に、「読み・書き」として文章の要約する能力を重視することにした。法学部の学修においては、ある程度まとまった分量の文章を読み取って内容を理解し、レポートなどの形で表現することが求められる機会が多い。しかしながら、高校修了までの学習経験において、例えば感想文以外にある程度以上の長さの文章を書く経験をあまり有していないと思われる学生が存在することが、法学部の教員の中で認識されていた課題であった。また、ノートの取り方が分からないと訴える学生も、少なからず存在していた。このため、法学部専門科目の教科書や講義の内容を理解できるようになるためにも、法学部生が早い段階から要約力を確実に身につけさせることが必要であると考えられたのである。

文章の読解と要約は、それを繰り返し行うことによって修得することが可能である。しかしながら、1年次生を対象にした少人数科目である「プレップセミナー」については、パソコンでのレポート作成、大学の学修支援システム・moodleへの提出方法などの初級のパソコン実習から、今後演習（ゼミ）での学修の基礎となるグループワーク、さらには将来を見据えた学修計画について考える機会など、盛り込みたい内容が数多くあった。そのため、文章要約のトレーニングに多くの時間を割くわけにはいかなかった。そこで、文章要約の方法について授業内で取り上げるのは1～2回に留めて、主としては課題方式で反復練習させることにした。要約課題で取り上げる文章は、各クラスの担当者の個性を出すことができるようにして、新聞のオピニオン記事や社説など、読み手が受け取るべき主張が比較的明確な（つまりは要約がしやすい）ものを取り上げることにした。

第2に、法学部での学修において必要な態度・志向性として、社会にあるさまざまな主張にはそ

れぞれに「理」があることを理解できること、そしてたとえ自分とは異なる主張をする相手に対してもそれを受け止めて、議論・説得を通じて合意や問題解決を行うべきであるとする態度を設定した。例えば法律学の学修では、異なる法解釈をする学説間の違いを理解し、どの学説・解釈を採るべきかについて説得力のある理由・論拠を付けて表現・主張することが求められる。また、法律学・政治学・政策学が対象とする、現実の社会問題や政治、政策課題に関しては、社会あるいは国家間やグローバルな空間において、異なる利害や価値観を持つ主体間の対立・調整が行われることがしばしばである。その際には、暴力や強制ではなく、議論と説得に基づいて共同的な意思決定・合意を行うことを目指す態度を身につけていることが、求められる。

こうした態度・志向性を修得する方法として、ディベートを「プレップセミナー」において中心的内容として取り入れることにした。ある論題に対して肯定派と否定派という対立する二者が、それぞれに論拠・理由付けをもとに主張しあい、最終的にはジャッジ（審判）が勝敗を決める。こうした過程を通じて、多くの論題、社会課題の解決方法において、「どちらか一方が明確に正しい」という単純なものではないということを、体験的に理解できるようになると考えたからである。また、単に主張しあうだけに終わるのではなく、ジャッジが勝敗を決めるというある種のゲーム性を取り入れることによって、理由付けの説得力の大切さを、受講生が楽しみながら理解できるようになると考えたからである。

何を主張するかではなく、主張を支える理由付け・論拠こそが重要であるということを理解できるようにするために、「プレップセミナー」におけるディベートでは、以下のようなルールを設定することにした。

- ① 肯定派・否定派のそれぞれの立論の機会は「第1立論」、「第2立論」、そして「最終立論」（サマリー）の3回に限る。それぞれの立論には、3分間の時間制限を設ける。
- ② 最初の主張である第1立論で示すことのできる理由は2点に絞る。理由がたくさんあることが正しさのもとになるのではないかという、陥りやすい誤解を避けるためである。
- ③ 第2立論では、相手の出した理由に対する反論を行う。
- ④ 最終立論（サマリー）では、相手側の第2立論に対して再反論を行うことができる

が、新たな論点（理由付け）を追加して提示してはいけない。

- ⑤ 質疑応答は行わない。
- ⑥ ジャッジは立論のたびごとに、説得力の高低を評価する（つまり 1 対戦において 6 回ジャッジをする）。最終弁論の印象に引きずられるかたちで評価してしまうことがないようにするためである。

ディベートのタイムテーブルは、図 1 の通りである。

第 1 立論（各 3 分）
①肯定側 → ②否定側 の順
作戦タイム（3 分）
第 2 立論（各 3 分）
③否定側 → ④肯定側 の順
作戦タイム（3 分）
最終立論（各 3 分）
⑤肯定側 → ⑥否定側 の順

図 1. ディベートのタイムテーブル

パッケージ・コースの主な内容の第 3 は、小論文である。理由付け・論拠を明確に示して主張を述べるのが、ディベートだけではなく文章を書く際にもできるようになるためである。レポートについても、調べたことを単に羅列するのではなく、主張・結論とそれを支える理由付けとの関係が重要であることを、意識させることが課題であった。

そこで、樋口裕一氏が提唱する「だろがかたしなよ」という「型」による小論文（樋口 2000）の作成ができるようになることを目指した。まずは形式を押さえることを通じて、主張と理由付けとの関係を区別・整理することの重要性を、理解できると考えたからである。また単一の標準の「型」を設定することによって、それを参照基準とすることで SA が小論文の添削をしやすくなると考えたからである。型は以下の 5 つの部分から成り立っている。「だろがかたしなよ」とは下線部をつなげたもので、小論文の構成要素と順番を、書き手に思い出させるものになっている。

- ① 問題提起：「～だろか。」
- ② 相手側の意見と理由付けの提示：「たしかに～（相手側の主張）という考え方もあるだろう。」
- ③ 自分側の意見の提示：「しかし～（自分の主張）と考える。」

- ④ 自分側の意見の理由付け：「なぜなら～（自分の主張の理由付け）だからである。」

- ⑤ 結論：「よって私は～と考える。」

さらに、小論文のテーマは、ディベートの論題を取り上げることにした。ディベートで議論をした内容・テーマを小論文の課題とすることによって、受講生はディベーターたち（あるいは相手側）の主張の理由付けを聞き取ることが必要になる。これによりノートテイクの練習にもなるだろうと考えた。また、小論文と連動する形にすることで、ディベートにおいても理由付けを整理して主張することが必要であることを、理解しやすくしている。

2.2.2. 「法教育演習 I」の内容と目指したもの

「法教育演習 I」は、その修了者が「プレップセミナー」の中で SA として新入生の学修支援ができるようになるための、トレーニング科目である。前項で述べたようなパッケージ・コースを学ぶ新入生の学修を支援するためには、まずは SA 自身がパッケージ・コースの内容について理解をし、①文章の要約のポイントを理解して適切な添削ができ、②ディベートの主張・理由付けを考えるためのグループワークに助言を与えることができ、③小論文の「型」を理解して適切な添削ができなければならない。そのため、「法教育演習 I」においては、まず要約課題とディベートの実践、小論文の作成を反復練習することにした。パッケージ・コースの学修内容について、新入生に対して（クラス担当教員と協働しながら）助言・指導ができるという自信を付けることが、到達目標となっている。

実は 1 年目の「法教育演習 I」がスタートした当初は、上記のパッケージ・コースの内容が完成していなかった。例えばディベートのルールについても、立論の回数や、議論を深めることを目的とした質問や自由討論の時間を取り入れるかについて、担当教員の間でも合意があった訳ではなかった。そこでディベートのルールをどのようなものにするかについては、「法教育演習 I」の受講生 1 期生も含めた、授業内での議論を通じて決めていった。また、小論文において「型」を重視するかについても、「法教育演習 I」の 1 期生が活発に表明した意見を参考にして決めていった。こうした経緯から、前項で紹介してきたパッケージ・コースの内容自体も、「法教育演習 I」の受講生と教員とによる共同作業によって作られてきたものであると言える。

2 年目以降の「法教育演習 I」では、上述のようにパッケージ・コースの構成と、それぞれの内

容において修得するものの意味を理解しながら、SA 候補者である「法教育演習Ⅰ」の受講生が自らの知識・技能を向上させることが、主な目標となっていた。但し、パッケージ・コースの内容は毎年少しずつ修正や更新をしている。それは後述するように、2015 年度以降は配当学年を下げたことで、1 年次秋学期に受講する学生が大半となったこととも関係している。プレップセミナーを 2 ヶ月ほど前に受講し終えたばかりの 1 年次生による振り返りを通じて、科目内容について受講生側の意見を聞く機会にもなったからである。

「プレップセミナー」のパッケージ・コースに関する理解と技能を身につけることと並ぶ、もう一つの「法教育演習Ⅰ」の内容の柱は、ファシリテーションである。先行事例（伊藤・吉永 2013）の経験を踏まえて、SA は授業補助員として教員の支援を行うのではなく、受講生を支援する立場であるとして設計された。また、SA は授業内での学修支援という、一般の学生とは違う立場になることから、これまでにない役割認識を持つことが必要になる。そこで注目したのが、学内に専門部署である「F 工房」が置かれ、キャリア形成支援教育のポータル科目等でも取り入れられていた（大谷ほか 2014）、ファシリテーションである。ファシリテーションとは協働促進とも訳される、グループでの議論や活動の過程を支援するはたらきである。法学部の授業についてもすでにいくつかの授業において、ゼミでのアイスブレイクなどの場面でファシリテーションの要素を取り入れたいと考えた教員から依頼する形で、F 工房との協働経験があった。

そこで、「法教育演習Ⅰ」の担当教員は授業設計を行う段階から F 工房に相談を始めて、SA に必要な能力・態度としてファシリテーションの観点からはどのようなものがあるのか議論をした。さらに、一部の回の授業設計についても F 工房に依頼をした。そして「法教育演習Ⅰ」開講後の 4 年間は、授業のうちファシリテーションに関する 3 回程度を、授業運営も F 工房の専門職員に担ってもらった。授業において取り上げたファシリテーションに関する内容は、以下のようなものである。

- ・ファシリテーションの意義とファシリテータの心構え
- ・アイスブレイクを行うことの意義
- ・アイスブレイクの企画と実施、実施後の振り返り
- ・受講生にフィードバックをするための観察の実践
- ・受講生にフィードバックをする際の留意点と

実践

- ・SA として遭遇する場面についてのロールプレイ

なお、2017 年度からは「法教育演習Ⅰ」を 2 クラス開講するようになったことなどから、それ以後の年度についてはファシリテーションに関する回についても、科目担当教員が実施するようになっていく。

2.2.3. 「法教育演習Ⅱ」の内容と目指したもの

「法教育演習Ⅱ」は、プレップセミナーにおける SA としての実践・実習について、SA 自身に対する教育効果を認めて授業科目とするものである。シラバスでは以下の到達目標を掲げている。

- ・「プレップセミナー」の SA として、1 年次生の学修を支援し、授業運営を助けること
- ・法的思考の基礎となる論理的思考のスキルに磨きをかけること

「法教育演習Ⅱ」は、単に「プレップセミナー」の中での SA 活動のみを授業内容としているものではない。第 3 節で述べるように、SA としての活動は導入教育における新入生に対する支援として、広範なものとなっている。

なお、「法教育演習Ⅱ」の評価は、「プレップセミナー」における毎回の SA としての実習とその報告のミニレポート、後述するランチミーティングへの参画、そして学期末に提出するまとめレポートなどから行っている。

2.2.4. 「法教育演習」とパッケージ・コースの設計における協働

パッケージ・コースの内容については、当然のことながら「プレップセミナー」の担当教員からのフィードバックをもとにして、その都度改善と修正を行ってきた。その過程は、「プレップセミナー」の担当者会議における議論が出発点になることが多い。それに加えて前項までに述べてきたように、パッケージ・コースの内容や「法教育演習Ⅰ・Ⅱ」の授業内容と構成については、「法教育演習Ⅰ・Ⅱ」の担当教員だけではなく、受講生である SA 候補者や SA、さらにはファシリテーションの専門部署である F 工房などの、多様な立場の人たちが協働しながら作成と改善を進めてきた。これにより、学修者本位の導入教育の設計・運営に近づくことができたのではないかと考えている。

2.3. 「法教育演習」の科目増設と展開

上述のように、「法教育演習」は「SA になるためのトレーニング科目（Ⅰ）」と「SA としての実践を行うための科目（Ⅱ）」の 2 科目体制でスタートした。そこから、SA 活動の教育効果を確認しな

がら、SA としての活動機会を増やしていった。さらには SA の育成においても、先輩学生が参画することを目指すようになった。それに伴い、「法教育演習」は当初の 2 科目から、3 科目、さらには 4 科目体制へと拡大していくことになった。

2.3.1. 「法教育演習Ⅰ・Ⅱ」の配当変更

SA の 1 期生は 12 名であった。その後も 3 年間は SA は 10 数人程度に止まっていた。このため、「プレップセミナー」でパッケージ・コースを採用する、すなわち「プレップセミナー」の授業内容をパッケージ・コースの内容で実施する、全てのクラスに対して SA を配属することはできず、SA は不足状態であった。「法教育演習」導入以前の「プレップセミナー」には、例外的に（制度化されていない）SA がただけで、ほとんどの法学部生が SA がどのようなものか知らない状況であった。そのため当初は、SA を志望する学生が少ないのも仕方がないと担当教員たちも考えていた。ただ、「プレップセミナー」で SA から支援を受けた経験を持つ学生が増えれば、SA を志望する学生が増えるだろうと期待をしていた。

しかし残念ながら、受講者数はそれほど増えなかった。考えられた理由としては、1 年次春の「プレップセミナー」から 2 年次秋の「法教育演習Ⅰ」までの間に 1 年間の時間が空いてしまうために、SA からの支援を受けた経験の記憶と「自分もやってみたい」という意欲が薄れてしまうのではないかとのことであった。そこで、2015 年度には配当学年を 2 年次以上から引き下げて、1 年次の秋学期から受講できるようにした。これにより、受講生が増えてパッケージ・コースのクラスに 1 名もしくは 2 名の SA が安定して配属できるようになった。

2.3.2. 「法教育演習Ⅲ」の創設

当初の科目構成では、SA としての実践科目は「法教育演習Ⅱ」のみであり、SA として参画できるのは 1 回だけという設計であった。しかしながら、SA 経験者はその実践を振り返ることで、さらに高度な学修支援に取り組むことができると考えられたし、SA 経験者からもそうした意欲を表明する者があった。そのため、2 回目の SA 実践を可能とするために、2015 年度春学期に「法教育演習Ⅲ」を増設した。

また 2017 年度からは、「プレップセミナー」だけではなく、「法教育演習Ⅰ」についても、SA を導入することにした。なお、「プレップセミナー」の SA と区別するために、以後本稿では「法教育演習Ⅰ」の SA は通称であるスーパー・スチューデント・アシスタント（以下、SSA）と表記する。

SSA を導入した理由は、「法教育演習Ⅰ」を修了しながらも、SA として配属されることを希望しない学生が、毎年一定程度いたためである。SA になるためのトレーニングを受けながら SA にならないことを選択した学生に対して聴き取りをしたところ、「自分が SA としてやっていけるか自信がない」という者が最も多かった。そこで、SA 経験を有する先輩学生が SA を育成・トレーニングする「法教育演習Ⅰ」に参画することで、受講生たちのロールモデルになることを期待したのである。実際に SSA たちは、さまざまな機会を通じて、受講生たちに対して「自分もはじめは不安があったが、SA をやって良かったと思っている」「成長する機会になる」などのメッセージを送ってくれた。さらに 2021 年度からは、SSA が学期内に 1 度行っている「法教育演習Ⅰ」の火曜・金曜クラス合同授業の企画・授業内容の設計と運営にも取り組んでいる。このような刺激を SSA が与えてくれたために、SA になることを決意できたという受講生も出てくるようになった。

2.3.3. 「法教育演習Ⅳ」の創設

前項の SSA の実践科目としては、当初は「法教育演習Ⅲ」を充てていた。すなわち、2 度目の SA としては、「プレップセミナー」で 2 回目の SA をするか、「法教育演習Ⅰ」の SSA をするか、選択できるような形態であった。

「法教育演習Ⅰ」の運営においても、SSA の参画は効果が高いことが分かってきたのであるが、2 回目を「法教育演習Ⅰ」で SSA としてやってみようという学生は、残念ながら少なかった。そして「法教育演習Ⅰ」の 2 クラスのうち、1 クラスには SSA が付かないという状況が続いた。そこで SA 経験者にヒアリングをしたところ、「プレップセミナーで 1 回だけ SA をやっただけでは、『法教育演習Ⅰ』で SSA ができるという自信を持つことができない」ということであった。そこで、「プレップセミナー」で 2 回 SA をやった上で SSA ができるようにするために、2021 年度から第 3 の実践科目として「法教育演習Ⅳ」を増設した。

表 1 は、これまでの開講・クラス増設などの経緯をまとめたものである。

表 1. 「プレップセミナー」と「法教育演習」の科目展開と受講者数（人）

	プレップセミナー	パッケージ・ コースの採用	法教育演習Ⅰ		法教育演習Ⅱ		法教育演習Ⅲ			法教育演習Ⅳ	
		クラス数									
2009 年度	秋学期開講（受講者がクラス選択）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
2010 年度	春学期開講に（自動クラス分け）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
2011 年度		－	－	火曜 クラス	金曜 クラス	－	－	－	－	－	－
2012 年度		－	－			－	－	－	－	－	－
2013 年度		－	1 クラス開講	－	12	－	－	－	－	－	－
2014 年度	SA 配属・パッケージ・コース開始	11	－	13	開講、SA 活動開始	12	－	SA	SSA	－	－
2015 年度		17	1 年次～配当に変更	－	13	7	開講、2 回目 SA 開始	3	－	－	－
2016 年度		18	－	40	2 年次～配当に変更	12		5	－	－	－
2017 年度		19	2 クラス開講に増設 SSA を導入	20	17	19	SSA も選択可能に	4	3	－	－
2018 年度		23		24	19	16		10	1	－	－
2019 年度		26		28	19	16		9	0	－	－
2020 年度	完全オンライン授業	24		25	23	17		10	0	－	－
2021 年度	約 1 ヶ月間オンラインで開講	24		19	20	27	2 回目 SA 専用	3	－	開講、SSA 専用	2
2022 年度		23		24	18	18		5	－		2

3. SA の活動の実態

本章では、SA の実際の活動がどのようなものかについて紹介する。

3.1. 「プレップセミナー」での SA の活動

「プレップセミナー」の各クラスへの SA の配属は、次のような手続きで行っている。まず、「プレップセミナー」の担当教員は自身が担当するクラスに SA を採用したい場合、その旨を「法教育演習」の担当教員に前年度末に伝える。「法教育演習」担当教員はそれを受けて、SA 側から配属を希望する曜日を聞いて調整を行う。配属は、在学生の時間割が確定する 3 月末には決定し、その後 SA とクラス担当教員の間で連絡を取り合って、開講に備える。配属を決める際には、SA ができるだけ多様な教員と関わりをもつことができるようにするため、所属する演習（ゼミ）の教員の担当クラスには充てないようにしているし、2 年目の SA をする場合にも、前年と同一教員のクラスには配属しないようにしている。

なお、パッケージ・コースを採用しない（パッケージ・ジースの内容の通りに「プレップセミナー」を運営していない）クラスもあるが、その場合には SA を配属していない。第 2 節で述べたように、SA はパッケージ・コースにおいて学修支援をするためのトレーニングを受けてきたのであり、SA とパッケージ・コースとはセットだからである。

3.1.1. 授業内での役割

「プレップセミナー」の授業内では、SA は次のような役割を果たしている。

1 つ目は、アイスブレイクである。多くの新入生にとって春学期初めの段階では、大学での大講義科目やゼミという学習形態に不慣れなことが多く、緊張している場合がある。そのため、受講者の緊張を解くアイスブレイクが実施されるクラスは多い。SA は担当教員と相談しながら、アイスブレイクの企画・実施をしている。受講生は、同じ学生立場である SA が進行することから、ゲーム自体を楽しんで緊張をほぐすことができているようである。また一部のクラスでは SA が受講生の緊張が解けていないと考えた時に、あるいは新しくグループ分けをした場合などに、授業内でアイスブレイクしてみてもどうかと、クラス担当教員に対して積極的に提案することもある。

2 つ目は、課題の添削である。パッケージ・コースでは新聞記事の要約課題や小論文課題が、事前・事後学習として課される。提出された課題に対して主として形式的な点を中心に添削を行ったり、コメントを付けることで受講生に対するフィードバックを行っている。パッケージ・コースの教材として、要約課題・小論文課題の「自己チェックシート」が準備されており、受講生、SA、教員の間で、レポート課題においてクリアすべき形式的なチェック項目が共有されている。これに基づいて、SA が添削を行っている。

3 つ目は、ディベートの進行に携わることと、ディベートの準備を行うグループワークを支援することである。ディベートでは通常、3 ～ 4 名程度のグループを編成して対戦を行っている。その際には、立論や予想される反論を調査に基づいて検討する、グループワークの時間が設けられる。その際に、話し合いが順調に進んでいるかを観察

し、議論が止まっているグループに対して声かけを行ったり、作業のヒントを与えるなどしている。さらに、後述のクラス対抗のディベート大会の前には、SA が自発的に独自に相談会を企画して、ディベートの立論について助言を与えることもあった。

また、授業内で SA が模範例としてディベートを行うことがあったし、その模範ディベートの動画を撮影して、「プレップセミナー」受講者がディベートの形式を学修してジャッジの練習をする際の教材として使われたこともある。このほか、クラス担当教員の求めに応じてディベートのテーマ設定について意見を述べる場合もあるなど、さまざまな形でディベート授業の運営に関与している。

4 つ目は、声かけと質問対応である。授業中の様子を観察し、例えばノートを取っていない、遅刻してきたなどの、授業進行についていけない受講生がいた場合に声をかけたりするほか、受講生からの質問に対応している。「プレップセミナー」の受講生からも、教員に質問をするよりも心理的なハードルが低いので SA のほうが質問しやすいので助かった、などの反応が見られる。

このほかに、キャリアガイダンスの授業回においては、先輩としてどのような学生生活を送ってきたのかについて、簡単なスピーチをすることもある。

SA は毎回の授業終了後に、「観察シート」を moodle の「法教育演習」のコースに提出する。観察シートの内容は、その回の授業概要と SA として行ったこと、授業を観察して気がついたことや振り返り、そして次回以降に向けた課題の検討と目標の設定などである。次項で述べるように、「プレップセミナー」の授業後にはランチミーティングに参加して、他のクラスの SA と情報交換を行って授業内での実践を振り返ることを経て、観察シートを作成する。

3.1.2. ランチミーティング

「プレップセミナー」は全クラスが、月曜日から金曜日までの 1 限目に開講されている。ランチミーティングでは、SA たちが（基本的には）授業のあった日の昼休みに昼食を持って集まり、当日の授業について振り返りと情報交換を行っている。

SA 制度開始 1～2 年目には、春学期の間に 2～3 回程度、SA が全体で集まって意見交換をする形式での振り返りをしてきた。しかしながら、ほとんどが 1 クラスに 1 名の SA しか配属されていないので（これは 2022 年度現在も続いている）、SA

活動で感じた疑問を解消したり相談をする機会が、限られたタイミングにしか持てないという問題があった。そこで、SA の数も増えてきた 2016 年度からは、週に 4 日程度のランチミーティング形式で、毎回の振り返りができるようにした。

ミーティングが単なる SA 同士の雑談や感想にとどまることがないように、「おしゃべりシート」の記入と提出を求めている。例えば、授業の中で SA として良かったと思う実践はどのようなものか、それはどのようにしたら広めることができるかなどの項目があり、ミーティング内での議論を通じて SA 活動の振り返りを促すようにしている。

3.1.3. SA として求められていることについて の共有

「法教育演習Ⅰ」の修了段階で、SA は一定程度の知識・技能・態度を身につけてはいるが、やはり個性や得意・不得意がある。例えば、新入生に対して積極的に声かけをして雰囲気作りに長けている SA や、要約課題への添削やコメントが丁寧な SA などである。また、パッケージ・コースを採用しているクラスであっても、進め方や重点の置き方については教員により違いがある。そのため、クラス担当教員が SA に対して期待することと、SA 自身が行いたいこととの間にズレがあるということが、課題であることが明らかになった。

そこで、2017 年度からは、「プレップセミナー」の授業内・外において SA に果たしてほしい役割について、「to do リスト（することリスト）」と「wish リスト（やってみようリスト）」としてまとめ、春学期開始前の段階で SA と「プレップセミナー」担当教員の双方に対して配布している。これにより、SA と教員との間で目標の共有を行っている。【本稿末尾の付録を参照のこと】

3.1.4. 「法教育演習Ⅱ・Ⅲ」の評価方法

SA が参加するクラスではすべてパッケージ・コースが採用されているとはいえ、その具体的な活用方式（順番や課題の出し方など）は、クラスにより差がある。このため、SA が果たしている役割もクラスによって違いがある。こうしたことから、「法教育演習Ⅱ・Ⅲ」の評価においては、「プレップセミナー」のクラス担当教員から意見や評価を求めず、各回の観察シートや学期末のまとめレポートにおける SA 自身の振り返りを基にして、「法教育演習」担当教員（現在は 4 名）が合議の上で評価をしている。まとめレポートでは主に、論理的思考力や振り返り・考察の内容の観点から採点をしている。

3.2. 授業外での SA の活動

SA の活動は、プレップセミナーの授業内やその事前学習・事後学習における新入生に対する支援だけにとどまらない。新入生が友達づくりなどの面でも円滑に大学生活に移行ができるように、各種イベントの企画・準備・実施を担っている。こうしたイベントは、SA たちがクラス担当の枠を越えて役割分担をしながら協働する、重要な機会となっている。

3.2.1. クラス対抗ディベート大会「二本柳杯」の運営

プレップセミナーの中心的内容であるディベートを通じてクラス間の交流を試み、新入生がディベートの能力を身につけたことを実感できるイベントとして計画されたのが、クラス対抗のディベート大会である。

2014 年の第 1 回大会は 2 クラスのみの参加にとどまったが、2 年目以降は参加クラスが増加して最大時には開講クラスのおよそ半分の 12 クラスが参加するまでになった。なお、第 1 回の勝利クラスが二本柳クラスであったことから、大会の名称は「二本柳杯」として定着している。この大会の企画から進行までの一切を、SA チームがクラス担当の枠を越えて、協働して運営をしてきた。SA 同士の「ヨコの連携」を経験できる機会となっている。

2020 年度のコロナ禍を契機として、さらには大会開催時に他の授業があるために参加できない学生も多くいたことから、大会参加クラスが全て集まる方式は取りやめている。その代わりに、同一曜日のクラス間で対抗ディベートを行う形で、「二本柳杯」が続いている。「プレップセミナー」の受講生が同学年の「良い見本」を見ることで、論理的で説得力のある主張の仕方についての理解を深める機会にもなっている。

3.2.2. J's コミュニケーション

「J's コミュニケーション」は 2014 年度からスタートした、入学式の前行われる法学部独自の新生歓迎イベントで、大きめの会場に集まって簡単な対話ゲームを行うものである。新入生同士の仲間意識の涵養にも効果が高く、「プレップセミナー」でのグループワークへの導入としても位置づけられている。

このイベント全体の企画からゲームのルール作り、司会進行、フロアでの進行補助までの各種の役割について、SA たちは分担して運営を担っている。こうしたイベントの企画・運営側になる経験は、SA として配属される学生にとっては「法教育演習Ⅰの受講生」の立場から「プレップセミナー

の SA」の役割に気持ちを切り替える、モード・チェンジの機会にもなっている。

3.3. コロナ禍とオンライン授業での対応

2020 年春学期には新型コロナウイルス感染症の拡大に伴いキャンパスへの入構が制限されたことによって、「プレップセミナー」についてもオンライン授業方式への転換を迫られた。また、新入生にとっては友達作りの機会が失われる状況に陥った。そうした中で、SA たちは授業の内と外の両方において、新入生への支援を試みた。

3.3.1. オンラインでの授業とランチミーティング

2020 年度春学期は、例年は「プレップセミナー」の最初に実施してきたパソコン実習を経ないまま、急遽オンライン授業をしなければいけないという状況からのスタートとなった。大学からはオンライン授業の実施ソフトとして Microsoft Office365 の Teams が提供されたが、オンライン授業をする側も受ける側も、その多くにとって初めてのことばかりであり、当初は戸惑いも多くあった。また、受講生の通信環境も違いがあるために、Teams の会議室を使ったオンライン・リアルタイムでの授業運営ができないことを想定しなければならなかった。

そこで、パッケージ・コースの内容を全て、オンライン学習版として再編集するところから取り組んだ。授業内容を PDF ファイル形式にして受講生が読むことができるようにし、ミニレポート課題に取り組ませて提出させる形式にした。また、ディベートについても、オンラインの会議室に参加が難しい受講生もいたことから、立論を小論文形式で作成する方式にした。オンライン会議室でのディベートを行ったクラスもあったが、全員が集まることを前提にすることは困難であった。このため、オンライン版の「プレップセミナー」では、グループワークの要素をあまり実践できなかったことが課題であった。

さらに、例年は行われていた、曜日ごとのランチミーティングも実施できなかった。しかし、オンライン授業に戸惑っていたのは学生である SA も同じであった。そこで週 1 回・金曜日の昼休みにオンラインで、SA 全員と「法教育演習」担当教員、そして法学部 FD 委員長が参加する形でのランチミーティングを行った。この場で、授業進行について確認をしたほか、オンライン版教材に対する意見や反応について情報交換を行った。さらには、オンライン授業の技術的な困りごとや疑問について解消する場となっていたほか、次項で述べるようなオンラインイベントの企画についての

議論も行われた。このようにオンライン版のランチミーティングも、SA 間および SA と教員とのコミュニケーションの重要な場となった。

3.3.2. オンラインでの授業外イベント

キャンパスへの入構が春学期じゅう制限されたことから、対面でのコミュニケーションの機会が極端に制限された。そこで、ランチミーティングでの SA からの提案により、「SA アワー」とオンラインイベントが企画された。

「SA アワー」とは、勉強や課題の取り組み方、レポートを書くコツなど、Teams を使って Web 上で SA が新入生からの相談に乗るという、SA 版のオフィスアワーである。6 月末から毎週木曜日の昼休みに、開催された。

次にオンライン交流イベントとして、「WEB J's コミュニケーション」が SA 主導のもとに行われた。イベントの目的は、①新入生が自分の勉強の理解度がどの程度かを客観的に確認できるようになること、②友達作りの機会とすること、である。7 月 1 日の昼休みにオンライン形式で開催し、およそ 100 名の参加があった。プログラムの第 1 部では、導入教育の講義科目の担当教員による講評とアドバイスが行われた。「憲法概論」、「民法概論」、「刑法概論」、「法律学入門」の担当教員が、事前に募集していた新入生からの質問に答えたり、レポートの評価方法や法律を学ぶ上で重要な「視点」などについて解説を行った。参加した新入生に対するアンケートでは、「オンライン授業ではリアルタイムで先生方のお話を聞く機会はあまりないので、勉強の仕方や課題の取り組み方についてお話を聞くことができて良かった」、「名前しか知らなかった先生方の顔や雰囲気を知ることができて楽しかった」などの感想が寄せられた。

第 2 部は、SA が進路や趣味など様々なテーマの「部屋」を用意して主催する形で展開した。テーマには、「公務員志望者」や「ゼミ・サークル」、「アルバイト」、「京都グルメを知りたい人」の部屋などがあり、SA が工夫を凝らして盛り上げていた。新入生同士はもちろん、教員や SA も参加して、オンライン上での会話を楽しんだ。アンケートでは、「先輩達が部活やサークルで経験したことを聞いたので、大学生活により一層期待が高まった」、「みんなも自分と似た悩みを持っていると知ることができて、少し安心した」などの感想が寄せられた。

このように突発的なオンライン化においても、SA は新入生を支援するという観点から、授業づくりやイベントの企画・運営などで導入教育に参画し、大きく寄与してきたと言えるだろう。

4. SA 制度の成果と課題

本章では、これまで報告してきた取り組みを通じて、どのようなことが達成されたのかについて、FD の観点と SA 経験者の立場から検討を行う。

4.1. FD の観点から

SA 制度の導入の意図は、導入教育の改善であった。そしてその方法は、先輩学生が教員を助ける授業補助員としてではなく、同じ学生の立場から新入生の学修を支援するというものであった。

これまで見てきた通り、法学部の専門科目を学ぶにあたって修得しておくべき基礎的な知識や技能と態度の認識について、教育内容を「パッケージ化」することを通じて、「プレップセミナー」担当教員間にあったバラツキを小さくすることはできたと言えよう。それは、担当者会議などでの議論と改善を重ねることを通じて、継続的に取り組まれてきた。パッケージ・コースでは、最終課題についても（定期試験やレポート課題の方式で違いはあるが）、文章要約と小論文作成の共通問題やひな形を作成している。受講生の到達目標についても、具体的なレベルで一定の共通化が図られていると言えるだろう。

個々の事例については紹介できなかったが、パッケージ・コースの内容や教材については、SA からのフィードバックや授業の観察をもとにした意見、「法教育演習Ⅰ」でのディスカッションを反映して、毎年少しずつ改善を重ねてきた。さらに、「法教育演習」の科目展開や SSA の参画においては、授業内容だけではなく科目設計のレベルでも、SA 経験者の意見が取り入れられてきた。教員たちによる FD というだけではなく、SA が協働する形での教育改善が、しかも教育内容や制度そのものについても、「プレップセミナー」と「法教育演習」で行われてきたと言ってよいだろう。つまり「法教育演習」という科目を核とした、教員、SA そして F 工房などの多様な参加者によって、導入教育の改善が行われてきたのである。

4.2. SA 経験者の立場から

SA 経験者の成長と到達目標の達成度を直接的に確認する材料となるのは、「法教育演習Ⅱ、Ⅲ」の最終課題であるまとめレポートである。「法教育演習Ⅱ・Ⅲ」の受講者の多くは、新入生のレポートの添削などの経験を通じて、論理的な文章の作成について自信をもつようになっていた。実際に、まとめレポートの点数（「法教育演習Ⅱ・Ⅲ」担当教員 3 人もしくは 4 人の平均）は 7 割あまりであ

り、ほとんどの受講生が6割を上回っている。これは、SAとしての活動とその振り返りについて、実際に論理的な文章で表現できるようになったことを示している。

また、SAとして人前で話す機会を経験したことから、これについての自信を深めることができたという振り返りも、まとめレポートでは多く見られる。

SA経験者の成長を確認できる2つ目の資料となるのは、オンライン授業下でのSAを経験した者(54名)に対して2022年3月にMicrosoft Formsを使って実施したアンケート調査である。回答数は20名であった。「SAをやってみて良かったこと」(複数回答)として、「先生と話す機会が多かった(15人)」、「同学年の人脈が広がった(10人)」という人間関係の面が多かったが、「要約、小論文、ディベート、添削の力がついた(10人)」、「人前で話したりすることに自信がついた(10人)」、「後輩を指導・支援することに自信がついた(9人)」、「積極的に取り組む姿勢が身についた(8人)」などの回答を得た。また、「オンライン授業の状況になって得たもの」(複数回答)として、「オンラインでのコミュニケーション・ツールの使い方が上達した(15人)」、「オンラインの場面であってもコミュニケーションを積極的にできるようになった(10人)」、「オンラインでのコミュニケーションがとるための企画・運営能力が身についた(10人)」という回答であった。なお、「得たものはない」という回答は0であった。「いま1回生に戻ったらSAをやってみようと思うか」という質問には18人が「思う」と答え、残りの2名は「分からない」と答えた。SA経験者の多くが、SA体験そのものや、突然のオンライン化などの非常に稀な厳しい体験であっても、それを積極的にとらえていたことを見て取ることができる。

5. 結語

本稿では、「法教育演習」を核とした「プレップセミナー」におけるSA制度の導入と展開を報告し、導入教育の改善過程について紹介してきた。同じ学生の立場で先輩学生が後輩学生を支援することとあわせて、導入教育の内容づくりにも学生を参画させることができた。また、SAとして参画した学生にも論理的思考力やリーダーシップ、積極性などにおいて成長実感が観察された。

本稿ではSA制度とパッケージ・コースの導入・展開の経緯を紹介することが中心であったので、SAや「プレップセミナー」受講生の学修成果につ

いて十分な検討ができたとは言えない。これについては継続的な調査を行い分析することを今後の課題として、本報告を終えたい。

謝辞

まず、SA(SSA、AB/ASを含む)として活躍し、多くの貢献とともに助言と指摘を与えてくれた9期にわたる学生諸兄諸姉に感謝いたします。また、法学部の同僚の先生方からも、SA制度とパッケージ・コースの展開において数多くの指導・助言をいただきました。SA制度の企画者の二本柳高信先生(現・専修大学)、吉永一行先生(現・東北大学)、増井敦先生、そして科目の共同担当者の山口亮子先生(現・関西学院大学)、岡本昌子先生、高島淳子先生、またとくに2020年度の突然のオンライン化の場面では佐藤誠先生との対話から、改善の糸口や考えるヒントをいただきました。さらに、F工房との協働を通じて、鬼塚哲郎先生、中西勝彦さん、大谷麻予さん、鈴木陵さんにはファシリテーションの奥深さと面白さを教えていただきました。

なお本報告の内容は、筆者の記録と記憶、評価をもとにしたものであり、その責任はひとり筆者にあります。

参考文献

- 藤田哲也(2006)「初年次教育の目的と実際」『リメディア教育研究』1(1):1-9
- 樋口裕一(2000)『ホンモノの文章力—自分を売り込む技術』集英社新書, 東京
- 伊藤琴音, 吉永一行(2013)「法学部「プレップセミナー」におけるスチューデント・アシスタント(SA)の試み」『高等教育フォーラム』3:39-43
- 大谷麻予, 中西勝彦, 松尾智晶(2014)「初年次キャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」キャリア科目担当学生ファシリテータ活動について」『高等教育フォーラム』4:71-80
- 渡邊大介, 吉永一行(2012)「学生による学部教育活性化のための活動(その1):学生履修アドバイザー」『高等教育フォーラム』2:75-78
- 山田礼子(2006)「大学における導入教育の拡がりと言義」日本学生支援機構 編『大学と学生』29:8-16

Report on the Collaboration of Faculty and Student Assistants (SAs) in Introductory Legal Education in the Faculty of Law: “Prep Seminar” and “Legal Education Seminar” Courses

Ayumu NAKAI¹

Since 2014, the Kyoto Sangyo University Faculty of Law has organized the participation of senior students as student assistants (SAs) to support the learning of students in the “Prep Seminar” courses offered during their first semester at the university. The contents of these courses are standardized to teach students certain core information and skills that form the basis of their future legal studies. To provide training and practice as an SA, a new course entitled the “Legal Education Seminar” was established, which has enabled the SAs, who come from diverse backgrounds, to work together with the course instructors as well as F Kobo, a department within the university specializing in facilitation, to improve the “Prep Seminar” courses through trial and error. We believe that through this process we are getting closer to designing and managing introductory legal education that is student-oriented. Additionally, the SAs were observed to benefit and grow in terms of logical thinking, leadership, and activeness.

KEYWORDS: Introductory Education, Teacher-Student Collaboration, Student Assistant (SA), Peer Support

2022 年 11 月 25 日受理

¹ Faculty of Law, Kyoto Sangyo University

【付録】 2022 年度版「to do リスト」と「wish リスト」

プレップセミナーの SA の to do リスト（することリスト）

= SA として毎週するべきこと

- ☐ 担当クラスの「プレップセミナー」に参画すること
 - 受講生から「見られている」存在であることを忘れずに！
 - 但し、「無理」をする必要はありません。
- ☐ 授業終了後すみやかに、「観察レポート」を書くこと
 - 振り返りは早ければ早いほど効果があります。
 - クラスの担当の先生にも、気づいたことを話して、聞くようにしましょう。
- ☐ 週に 1 回「ランチミーティング」に参画すること
 - （できるかぎり定例曜日の昼休みに）
 - （基本は）プレップセミナーの担当曜日のミーティングに参加します。
 - SA 同士で気になること、分からないこと、うまくいったこと・・・を共有します。
- ☐ ミーティングのあとに観察レポートを完成して、moodle に提出すること
 - 「溜める」と後から大変ですし、毎回の積み重ねが成長につながります。
 - wish リストの項目を参考に、振り返りや目標の設定をします。

注意：「参画」≠「出席」です。役割を果たすことで、初めて「参画」になります。

プレップセミナーの SA の not to do リスト（やめた方が良くないことリスト）

- ☐ 受講生と同じ Line グループ（など）に入ること
 - 受講生からの質問の対応に、24 時間追われることになってしまいます。
- ☐ 授業資料のコピーなどをすること
 - SA は TA（Teaching Assistant）とは異なり、教員室などに入って印刷をすることはできません。

■参考：「法教育演習 II と III の到達目標」

- ・プレップセミナーの SA として、1 年次生の学修を支援し、授業運営を助けること
- ・法的思考の基礎となる論理的思考のスキルに磨きをかけること

プレップセミナーの SA の wish リスト（やってみようリスト）

以下の内容は「基本編」です。クラスの先生と相談して、追加 or 削減するようにします。

(1) プレップセミナーの授業時にしてほしいこと

- ☐ 受講生の様子を観察し、受講生が次のことをできるように促すこと・支援すること
 - ☐ 授業に来る
 - ☐ 教員からの問いかけに対して、自発的に発言をする
 - ☐ グループでの話し合いに参加する
 - ☐ グループで連絡をとりあい、グループで事前事後学習ができるようになる
 - ☐ 課題を提出する
 - ☐ メモやノートをとる（ことと習慣づける）
- ☐ アイスブレイキングのゲームを企画・実施・展開すること
- ☐ 受講生の行動や発言を認めること、あるいはほめること
- ☐ 受講生の質問に対して（自分で分かる場合には）答えること
- ☐ 受講生が分からないことや困っていることについて、担当教員に伝えたり、引き継いだりすること
- ☐ ディベートの際に、模範を示すこと
- ☐ ディベートのタイムキーパーをすること
- ☐ ディベートやグループワークについての振り返りのときに、コメントをすること
- ☐ キャリアガイダンスなどの機会に、先輩としてスピーチをすること

(2) プレップセミナーの授業前にしてほしいこと（担当の先生と相談のうえで）

- ☐ 次回の授業について、担当教員と打ち合わせをすること（役割分担の相談など）
- ☐ 事前課題（新聞記事要約・小論文）の校正をすること
 - = 形式についてチェックをすること
- ☐ 事前課題（新聞記事要約・小論文）にコメントをつけること
 - = 感想や意見などを書くこと
- ☐ ディベートのテーマについて予め調べて、グループやチームの議論をサポートできるようにしておくこと

(3) そのほかに努力してほしいこと

- ☐ 論理的な思考を身につけること
- ☐ 文章や話を早く正確に要約できるようになること
- ☐ 受講生にとって魅力的な先輩となって、来年度 SA になってくれる / なってほしい学生をリクルートすること